

世界列車の旅 (その2)

Traveling by Train the World (part 2)

古里明瑠

Akaru Furusato

EICA 名誉会員

1. ヨーロッパの鉄道

(5) ロシアとフィンランド間の国際列車

ヨーロッパの大都市の駅は、行先別にターミナル駅になっていて、駅名が行き先名になっている例が多い。ロシアのサンクトペテルブルグ（ソ連解体後レーニンградから旧名に復帰）に、世界3大美術館の一つと言われるエルミタージュ美術館を訪れた後、ヘルシンキ駅からヘルシンキに向けて国際寝台列車に乗車したが、ソ連解体後ながらロシアは厳しい警備体制が敷かれており、駅で写真を撮っていたところ、警備員らしい2人連れの男性から制止された。ツアーガイドの話では、以前は駅を撮影しただけで拘束されることもあったそうで、フィルムを没収されることもなかったが、あまり気持ちのよい経験ではなかった。ロシア滞在中は、パスポートをホテルに預けなければならず、列車内は国境管理官が保管していたようで、ロシア領の国境駅に到着する前に、座席まで回ってきて、一人ひとりチェックしながら、面倒くさそうに投げ渡す感じで返却された。

いかにも国境らしい無人の山野が続いた後、小一時間ほどでフィンランド側の国境駅に到着。乗り込んできた入国管理官は、にこやかで、一人ひとりに「サンキュー」と声掛けしながらパスポートチェックを済ませ、手を振りながら下車して行った。

係官の相違もさることながら、車窓風景の違いも際立っていた。ロシア側は、駅前風景も寂れた感じで、駐車している車も日本では見かけないようなオンボロ

の中古車で、街並みもくすんだ感じであったが、フィンランド側に入ったとたん、絵葉書に見る典型的なヨーロッパの農村風景（赤い屋根に白い壁の家、手入れの行き届いた屋敷林、ピカピカのトラクター）に一変した。

国境を挟んで僅か小一時間移動しただけで、人の接し方から、車窓の風景まで激変して、列車の旅であるからこそ、国の相違、体制の違いを肌で感じさせられたことであった。

(6) スイスの登山列車とスキー

アルプス山脈はフランスからイタリア、ドイツ、オーストリア迄連なっているが中心はスイスで、有名な山が陸続と連なっていて、登山に関わりがなくても、観光で訪れた方は多いはずである。若いころから山登りをかじったこともあり、ロッククライマーの聖地とされるアイガー北壁は、グランドジョラス、マッターホルンと並び三大北壁とされているが、登ることは叶わなくても、一目眺めてみたい山の一つであった。平成8年5月の連休中に水道の研修ツアーに参加した際、インターラーケンから登山列車で絵葉書さながらの谷越えの風景を堪能しながら乗換駅のクライネシャイデック (2.061 m) に到着、1.500 m 位からは雪が積もっていて白一色の世界で、ユングフラウ山 (4.158 m)、アイガー山 (3.970 m)、メンヒ山 (4.099 m) が、西から東へ目の前に迫ってくる。駅を挟んで南側200mほどの高台に、山岳小説家として著名な新田次郎の分骨碑があるというので登ってきたが、地面に埋め込まれた目立たない竹まいながら、山を愛した作家の想いが伝わるアイガー北壁を正面に見渡す絶景ポイントであった。

クライネシャイデックから乗り換えるユングフラウ・ヨッホ駅 (3.453 m) までの登山鉄道は、1904年開通で、今でもヨーロッパ最高地点の鉄道駅である。全長約9 km で、急勾配のためラック・ピニオンの第3軌条付鉄道となっている。アイガー山をトンネルで登っていくのだが、アイガー北壁の中腹に途中駅の一つがあり、ホーム壁に展望窓が開けられていて、間近に岩壁を見渡しくライマー目線を実感することができて感激した。最近のダイヤ改正で、このサービスがな



エルミタージュ美術館 正面



ユングフラウ鉄道（ラックピニオン軌条敷設）

くなっているようで、残念なことである。終点のユングフラウ・ヨッホ駅はトンネル内にあり、氷河をくりぬいた「氷の宮殿」が作られていて、太陽光線が青く透過して、ディズニー映画の一場面を見ているようであった。エレベータで上がって、ヨッホの最高地点のスイス国旗のある場所までは、吹雪の中を少し歩いたが、吹雪の合間には、麓をはじめユングフラウの頂上や、はるかにモンブラン山なども眺められ、高山病でふらつきながら、しばし絶景を楽しんだ。（蛇足ながら、ヨッホとは山の鞍部のこと）

週末は、研修ツアーから離れて、有志2名を誘ってチューリッヒから、列車で環境配慮リゾート地としても有名なツェルマットへ行き、村営ホテルに1泊して、スキーを楽しんだ。5月初めながら3,000 m以上の地なので、雪質も良く、絶好の好天に恵まれ、マッターホルンを背景に氷河の上を滑る楽しさは格別であった。ツェルマットは、環境規制で交通機関はバスを含め全て電動式であったが、建設重機は例外とのことで、ディーゼルエンジンが黒煙を吹きながら工事をしていて、ちょっと意外な感じがした。帰途予定した直通列車が



マッターホルン氷河上でのスキー

週末運休なことが分り、急遽ベルン経由の大回りで、特急列車を3本乗り継ぐことになり、ベルンでは1分の乗り換え時間しかないなど、ハプニングもあったが、ベルンからチューリッヒ迄の間は、ずっと平坦な平野が続いていて、スイスが山岳だけの国ではなく、食料自給率が100%であること納得したことであった。

(7) デンマークのローカル列車, 他

デンマークのコペンハーゲンには、前後10回ほど訪れたことがあり、ハムレットの舞台となったクロンボルク城を観光して、対岸のスエーデンのヘルシンボリフェリーで往復したローカル列車の旅で、朴訥な農民風の5歳くらいの男の子連れ若夫婦と同席した。子供は外国人が珍しかったと見えて、触りに来たりしてチョコカイを出すので、いかにも済まなさそうにされていたが、手元に持っていたボンタン飴をあげて、子供とはすっかり仲良くなり、途中駅で下車して別れる際に、ほっぺにチュウを貰った。

ICAの第8回ワークショップでは、メンバー皆様とコペンハーゲンからスエーデンのマルメまで、トンネルと海峡橋で国境を超える国際列車で移動したが、沿線の海上に無数の風力発電機が林立していて、北欧の脱炭素化への意気込みが感じられて圧巻であった。

そういえば、オーストリアのウィーンからザルツブルグに日帰り往復旅行をした際に、市内バス内に手許用のバッグを置き忘れ、警察に届け出をした後、往復切符もバッグの中だったので、駅窓口で話したところ、列車内で事情を相談してくれと言われ、検札に来たドイツ・ミュンヘン発の国際列車の車掌に相談したところ、無礼で乗車をさせてもらえた。この話には、更に、続きがあり、1か月ほど後に、オーストリアの日本大使館から連絡電話があり、小バッグが届いているので、着払いなら送って頂けるとのことで、最終的に無事手元に戻ってきた。国内と違い、海外で落し物が無事手元に戻ってきたのは、初めての経験で、届けて頂いた方にお礼も出来ないままながら、海外でも、「渡る世間に鬼はない」と、今でも感謝をしている。（クレジットカード類、往復切符もバッグ内に、そのまま残っていた。）

ノルウェーのオスロから北上して、スカンジナビア山脈を横切り、海岸から200 km以上も入り込んだフィヨルドの奥の鮭養殖場を訪れ、大西洋岸までの路線上で、フィヨルドの切り立った断崖をスイッチバックで登り切った臨時駅のプラットフォームから眺めたフィヨルドの水の藍と北欧の澄み切った空の青のことなどなど。（鮭は、養殖の方が餌、病害虫の管理が徹底しているので、天然物より安全であるとのこと。）

欧州列車旅の思い出は尽きない。